寂然の家集より見たる寂然の歌と西行歌の近さと遠さ

中哲裕*

(一)

寂然(藤原頼業)には、高松宮蔵本『唯心房集』をはじめとして、書陵部本『唯心房集』・『寂然法師集』など、いくつかの家集が残されている。寂然が西行と密接な関係にあったことは諸家の指摘する通りであるが、具体的に寂然と西行の歌をつき合わせて、両者の歌の交渉、素材や構成、歌境の類似等の近さと遠さ、歌の深さに測深鉛を降ろして、両者の関係を寂然の側から考察したものはないのではないか。

寂然の歌と西行歌との交渉といってもいろいろな場合が考えられる。歌の贈答という形でやり取りされたものもあれば、片方から片方のことを思いやって詠まれたものもある。同じ場所で同じ時に詠まれたものもあれば、場所は同じでも詠まれた時日の異なるもの、あるいは時日や場所が異なるにも拘らず、歌境や素材の著しく接近しているものなどもある。そういう歌の製作の時空が異なるとはいっても、全く無視し切ることのできないものを比較検討することにより、両者の歌の近さと遠さ、深浅を探ってみたいと思うのである。

なお引用本文の底本として、高松宮蔵本『唯心房集』は『新編国歌大観』を、書陵部本『唯心房集』と『寂然法師集』は『私家集大成(中世Ⅰ)』を、西行の『山家集』は新潮日本古典集成『山家集』を、『西行法師家集』『聞書集』『残集(西行)』は『新編国歌大観』を使用した。また『私家集大成』本文は濁点がないので、引用に際しては読み易くするために筆者が濁点を付したり、踊り文

字を訂正したりしてある。その他の資料は、使用する毎に注記することとした。(注1)

（二）

諸家の注目する通り、高野山の西行と大原の寂然の間に、修行中の奥山の住まいの孤独をそれぞれ十首ずつ贈答したものがある。

入道寂然、大原に住み侍りけるに、高野より遣はしける

一一九八山深みさこそあらめと聞えつつ音あはれなる谷の川水

一一九九山ふかみ真木の葉分くる月影ははげしきものの すごきなりけり

一二〇〇山深み窓のつれづれ訪ふものは色づきそむる黄櫨のたちえだ

一二〇一山深み苔のむしろの上に居て何心なく啼く猿かな

一二〇二山深み岩にしだるる水溜めんかつがつ落つる椽拾ふほど

二

一二〇三山深みけ近き鳥の音はせでものおそろしきふくろふの声

一二〇四山深み木暗き峯のこずゑよりものものしくもわたる嵐か

一二〇五山深み樅伐るなりと聞えつつ所にぎはふ斧の音かな

一二〇六山深み入りて見と見るものはみなあはれもよほすけしきなるかな

一二〇七山深み馴るるかせぎのけ近さに世に遠ざかる程ぞ知らるる

寂然

一二〇八あはれさはかうやと君も思ひやれ秋暮れがたの大原の里

一二〇九ひとりすむおぼろの清水友とては月をぞすます大原の里

一二一〇炭竈のたなびくけぶりひとすぢに心ぼそきは大原の里

一二一一なにとなくつゆぞこぼるる秋の田に引板引き鳴らす大原の里

一二一二水の音は枕に落つるここちして寝覚めがちなる大原の里

一二一三あだに吹く草の庵のあはれより袖に露置く大原の里

一二一四山風に峯のささ栗はらはらと庭に落ち敷く大原の里

一二一五ますらをが爪木にあけびさし添へて暮るれば帰る大原の里

一二一六蓬這ふ門は木の葉にうづもれて人もさしこぬ大原の里

一二一七もろともに秋も山路も深ければしかぞ悲しき大原の里　以上「山」

西行から寂然に、「谷の川水」「真木の葉を分ける月影」「黄櫨のたちえだ」「啼く猿」「かつがつ落つる橡」「ふくろふの声」「峯の梢よりわたる嵐」「楢伐る斧の音」「かせぎ(鹿)」など、高野山の周辺の風景が、寂然からは、「おぼろの清水」「炭がま」「引板引き鳴らす音」「庭に落ちるささ栗」「爪木のあけび」「蓬這ふ門」「鹿」など、高野に劣らぬ秋の大原のさびしさを詠んだ歌が送り返される。これらは『山家集』に残される西行と寂然の直接の歌のやりとりである。

高野のしみじみとしたさびしさを寂然に歌いかけている歌に関連して

高野より、京なる人に遣はしける

九一三すむことは所がらぞといひながら高野はもののあはれなるかな　「山」

六八おく山のあきのこころをいかにしてあはれしれらん人にしらせん　「高・唯」

九一三番歌は都の女性にあてたものかと、一応注されているが、六八番歌と呼応しあっている様な気がする。(注2)この二首はいずれも相手が西行や寂然と明記してあるわけではない。高野がいかに京都から離れていても、大原の寂然を「京なる人」と想定することは無理なのである。しかし深山で修行する二人の歌人僧の、修行のあい間でひと息ついた時の孤独な感懐が聞こえてこないだろうか。

山では冬の到来は里よりも早い。その厳しい寒さの中での修行に耐えながら、同じ苦行に耐えているはずの相手への思いやりとして、歌のやりとりがなされている。これも西行からの贈答である。

冬ごもるころ西行がもとより

一二四おほはらはひらのたかねのちかければゆきふるほどをおもひこそやれ

かへし

一二五おもへただみやこにてだにそでさえしひらのたかねのゆきのけしきを[注3]　「高・唯」

その他、直接の歌の贈答としては、西行が旅する時常に側についていた西住が死んだ時のもの[注4]、「兄入道想空はかなくなりにけるを、とはざりければ言ひ遣はしける」と詞書のある『山家集』の八三三～八四三番歌、崇徳院没後に院の死を悼んで西行が寂然と歌をやり取りしたもの（『山家集』一二二八・九番歌）、その他西行が常磐の里で常磐一族の人々と連歌したもの（『聞書』一三～一九番歌）などが残っている。

高野山と大原の間で歌を贈答し、孤独を慰めあうばかりではない。相手の修行の場を訪ねあって、寂然は高野山を、西行は大原に行くこともあった。

『山家集』一〇四五番に「秋の末に、寂然高野にまゐりて、暮の秋に寄せて思ひを述べけるに」と詞書した寂然の歌、一〇五五・六番歌は「寂然高野にまゐりて、たちかへりて、大原より遣はしける」と詞書した寂然と西行の贈答歌、同じく一〇七四・五番歌に「寂然、紅葉の盛りに高野にまゐりて出でにけり。またの年の花の折に申し遣はしける」としての西行と寂然の贈答歌がある。一〇七五番の寂然の返歌は、一〇四五番歌の、寂然が高野を訪問した時の翌春のことであろうか。一〇四五番では「秋の末に」寂然が高野を訪ねたことになっていて、一〇七四・五番歌では「紅葉の盛り」の頃となっている。『西行法師家集』二四八番歌の詞書により、寂然が高野で「宮法印」の庵室の歌会に出席していることが知られる。少時の逗留の期間があったと見て、寂然の高野訪問は一回と推測していいのであろうか。

また、

秋頃、高野へまゐるべき由たのめてまゐらざりける人の許へ、雪降りてのち、申し遣はしける

五三一雪深くうづみてけりな君来やと紅葉のにしきしき山路を　「山」

と、秋頃高野へ行くからと頼みにさせておいて来なかったのは寂然であったろうか。そのように考えてもよさそ

うに思われるが、これも断定は致しかねる。

これらはいずれも西行の家集から見た寂然の高野訪問の証拠であるが、寂然の家集の中にもいくつかその根跡を指摘できる。

七三あしたのとこををくるより　まくらさだむるゆふべまで　八万四千のおもひありとかや　それみなみつのこうぞかし　「書・唯」

七九きくにたうときやまのなは　霊鷲鶏足天台山　文殊のいますなる清涼山　真言ひろまる高野のやま　「書・唯」

六七はなさかぬこずゑもみえずおほかたはゆきのうちをぞはるといふべき　「書・寂」

六五みよしののやまべのゆきのつもるにはまづふるさとぞ冬ごもりける　「書・寂」

推測の域を出ないが七九番歌は実際に真言の教えが弘まり、にぎわっている高野山を見て作った歌であろうか。七三番歌の「みつの劫」は「三劫」のことで、真言宗でたてる三つの妄執（「麁妄執」「細妄執」「極細妄執」のこと）の異名だとされる。後半の歌の意味は「一日の内に八万四千ものいろいろな煩悩が心にわきおこるということだが、それも三つの妄執によるということだ」ということだろうか。天台僧の寂然が真言の教理に接する機会はいろいろあったろうが、一番可能性が大きいのは西行との交渉を通じてではなかろうか。

六七番は、枯木に雪が付着して梢を隠してしまっている。それが満開に咲く桜のような幻想に誘ってくれるという歌である。

五一二やまざくら初雪降れば咲きにけり吉野は里に冬ごもれども　「山」

五六五吉野山麓にふらぬ雪ならば花かと見てやたかねらましし　「山」

『山家集』のこの二首は雪を花に見たてている。六七番歌と同様の発想である。六五番歌も五一二番歌につき合わせて考えると、或は秋の末に寂然が高野山で詠んだ歌であろうか。

高野山と真言に言及したついでに、寂然の唯心房という法号についても触れておこう。寂然の歌には素材として「こころ」が詠み込まれたものは多い。高松宮蔵本『唯

心房集』を例にとると、「心ぼそし」「ここちよげ」など、ひとつの単語の中に含み込まれたものも加えて、全一六四首の中の二九首にもわたって使用されている。中には四二番歌のように「いけのこころ」（池の中心）という意味で使用されることもあるが、[注5] 多くは自分自身の「心」を指し、素材としての「月」と抱き合わせで詠まれることも多いのである。高松宮蔵本『唯心房集』八七番から一〇九番までの二十三首の「月」の歌のうち、「こころ」が「月」と一緒に詠み込まれているのは八首、実に三分の一に及ぶ。そのことには一体どういう意味があるのだろうか。

『新後撰和歌集』に

六五三いさぎよく月は心にすむものとしるこそやみのはるるなりけり

という小侍従の歌が採られている。そこには「心月輪の心を」と詞書されていた。寂然の数多く詠まれている月の歌も、基本的には風景としての月ではあるが、実は風景に託して心の中の月を歌ったものも多いのではなかろうか。たとえば、

一〇三あだぐものちりなきそらもあるものをこころの月よいつかすむべき　「高・唯」

という歌の月は、明らかに実景としての月ではない。そしてその「心の月」というのは、先に引用した小侍従の詞書にあるように「心月輪」の「月」、「月輪観」の「月」なのである。

月輪観は、密教の基本的な観法である。自己の心の本質を満月輪として象徴し、これを胸中に観想して本源的な心の清浄性を体得しようとする。この月輪はすべての有情（衆生）に内在する仏性、菩提心の象徴であり、実修にあたっては月輪を描いた掛けものを用い、その月輪は金剛界十六大菩薩を表わし一尺六寸の大きさに作られる。

寂然の兄の寂超は「日想房」と号した。それは『観無量寿経』に説かれる観想の初観の「日想観」からとったものである。寂然の法号の「唯心房」もこの密教の行法の「月輪観」と密接な関係があるのではなかろうか。そしてこの「月輪観」も本来は真言密教のもので、後に天台にとり込まれたものであったのである。[注6]

(三)

以上、寂然の高野山訪問と真言との接点について考察してきた。一方、西行から寂然の生活圏への訪問もあった。

人を尋ねて、小野[注7]にまかりたりけるに、鹿の鳴きければ

四四一鹿の音を聞くにつけてもすむ人の心知らるる小野の山里　「山」

大原にて、良暹法師の、まだすみがまもならはねば、と申しけむ跡、人人見けるに、ぐして罷りて、よみ侍りける

四五二大原やまだすみ釜もならはずといひけん人を今あらせばや[注8]　「西」

常磐の里にて、初秋月といふことを人々よみけるに

二五六秋立つと思ふに空もただならでわれて光をわけん三日月　「山」

四四一番歌の「鹿」について、高野と大原の贈答歌の中で寂然も素材として歌っていた。四五七番歌・二五六番歌、いずれも常磐一族と座を同じくして西行の詠んだものである。四五七番歌に関しては本歌がある[注9]。良暹の歌以来「炭がま」は「おぼろの清水」と共に素材としてよくとり上げられ、西行や寂然によって歌われている[注10]。

二五六番歌が常磐の里で詠まれた時、おそらく寂然もその場にいあわせたろうと思われるが、この歌の場合に限らず西行はかなりたびたび常磐の為忠の別荘を訪問し、常磐一族の人々と歌を詠んでいたものと思われる。

その他、たとえば『残集(西行)』の一三番から一九番には、為業、寂然、静空(想空)、寂超、西住らと共に連歌を楽しんだ記録が残されている。それら常磐一族のひとりひとりと西行との交流については西行側の資料からも追求でき、西行と寂然との関係が直接の歌の贈答という正面から向きあうものばかりではなく、一族ぐるみの交際であったことが想像されるのである。たとえば『山家集』八三三番から八四三番まで、想空の死に関して何のくやみもなかった西行に、兄に死なれた自分の孤独を想像して欲しいという寂然に、それで慰められるのであれば「千度(ちたび)」でもお慰め申し上げるのだがと西行は答え

ている。また寂超は、『山家集』九二九番歌から九三四番歌に、新院（崇徳院）が歌を集めているからと、父と弟の寂然の歌を集めて西行に見せに来たりしている。常磐での為業の堂供養では西行は為業（寂念）と唱和している[注11]し、二条院がなくなっての追善供養で三河内侍（寂念の娘である）と西行との歌のやりとりもある。俊成の先妻だった寂然の妹が、寂超の出家後その妻を後妻として俊成が迎えたため（美福門院加賀）、大原で出家して尼になる。その尼の死に際し、寂然と西行との間で歌の贈答がなされている（『山家集』八一五・六番歌）。推測の域を出ないのであるが女人往生を扱う寂然の今様歌[注12]は、彼女の死に関連して歌われたものであろうか。

西行側のこれらの資料はこの位にして、寂然側の家集にも一族を混じえての西行との交際とあながち無関係とも思われぬ歌がいくつかあるので指摘しておく。

一〇〇いでしよりいへのかぜをもわすられてちらすばかりのことはぞなき　「書・寂」

これは寂超が寂然から歌をとり寄せた時に歌われたものであろう。「家の風」「散らす」「言の葉」など、想空と西行の唱和と、用語が重複する。出家してしまった身となっては「家の風」は忘れてしまったのだからと一応は謝絶しながら、結局は自作歌を提出したのであろうか。

また妹の死に際しては、仏道には入るには入ったけれども自分の身に引き寄せて考えると極楽に往生できるかどうか不安であるという。その一方で

六二三けうしみのむしろには　五さうありとてきらはれし　女人へだてぬみのりこそ　我らがためにはうれしけれ　「書・唯」

と、今様歌の形式で女人でも往生できるという『法花経』の功徳を称えているのであるから、実はこの六二番歌は妹の極楽往生の問題と向き合っているのではなかろうかと思われるのである。

更に高松宮蔵本『唯心房集』の九九・一〇〇・一〇一・一一七・一一九番歌、書陵部本『唯心房集』四四番歌、書陵部本『寂然法師集』五四番歌など、家集の中でいくつか常磐の旧邸で歌われたらしいと思われるものが指摘できる。その中で

一一七あはれとや見る人あらばおもはましもみぢちりつ
　むやどのけしきを　「高・唯」
六一八あはれとも見る人あらば思ひなん月のおもてにや
　どる心は　「山」
四四あれたるすみかをきてみれば　まがきにうつして
　きみがうへし　ひとむらすすきむしのねの　しげ
　きのべとぞなりにける　「書・唯」
　故郷述懐といふことを、常盤の家にて為業詠み
　けるに、まかりあひて
七九六しげき野を幾ひと群に分けなしてさらに昔をしの
　びかへさん　「山」

詞書にすべて明記してあるわけではないので断定はできないが、一一七番と六一八番、四四番と七九六番歌のように、同じ時に同じ場所で詠まれたのではないかと想像させる歌も指摘できるのである。

（四）

旅の歌で瀬戸内の海に関連した寂然の歌がいくつか残っている。それがどういうわけか西行歌と向きあって いそうに思われるものを指摘する。

　心ならずふなでして、とをきゐなかにすむ人を
　おもひやりて
一一〇くもゐにてむかしながめし月のみやたびのそらに
　もはなれざるらん　「高・唯」
　旅にまかるとてよめる
四七二月のみやうはの空なるかた見にて思ひも出でば心
　かよはん
四七三見しままに姿も影もかはらねば月ぞ都のかた見な
　りける　「西」
　はりまの書写の阿闍梨といふ人に、灌頂せむと
　てしたしき人いでたつところにまかりて
一三四さしてゆくあかしのうらのなみのうへにかねて心
　の月やすむらん
　たびのとまりのわかれといふ心を人人よみけれ
　ば
一三五はるかにもなみぢをおくるこころかなくもゐにき
　みがふねかすむまで
　海路の月といふ心を人にかはりて
一三六わたのはらこぎゆくふねともろともになみぢをす

ぐるありあけの月　「高・唯」

旅の歌詠みけるに

一一〇二わたの原波にも月は隠れけり都の山を何いとひけむ　「山」

一八三播磨がたなだのみおきにこぎ出ててにしに山なき月を見るかな　「西」

一三七すみわたるなみぢの月ははままつのかげばかりこそくもりなりけれ　「高・唯」

一六〇なにはえのきしにそなれてはふまつをおとせであらふ月のしらなみ　「聞」

寂然の一一〇番歌は「心ならず船出して遠き田舎に住む人」を思いやっての歌、「月のみや」は「月ばかりが」という限定の意と「月の宮」とが掛詞になっている。[注13] 一三四番歌は「播磨の書写」へ行く「親しき人」を見送って、一三五番歌は旅先での別離を詠んだものである。これらの寂然の歌に対応する西行歌をそれぞれ対照させてみると、それぞれの歌の素材や歌の世界に共通するものがあるのに気付く。しかし寂然の歌の別離の相手が西行であったら、どうして西行と明記されないのであろうか。殊に一一〇番歌の「心ならずふなで」して遠い田舎に住む人、また一三四・五・六番歌の別れの相手は一体誰であったのだろうか。

仁安二年の西行の西国行脚については、『山家集』や『西行法師家集』に記述されているし、その他の播磨の書写山への旅、天王寺での歌も残っている。西行のこれ等の歌を仁安二年の時にのみはめ込む必要は更にない。一方寂然も大原にのみ閉じこもっていたわけではない。引用した歌のように灘波江や天王寺へも出てきているし、家集以外の資料も参考にすれば四国へまでも旅してもいるようだ。その時、讃岐に流された崇徳院に会ってきているが、一一〇番歌の相手は保元の乱で後白河院側に敗れた崇徳院、またはその周辺の人なのではあるまいか。

通説によれば寂然は崇徳院の殊遇を蒙った歌人僧[注14]ということになっている。しかし寂然の家集の中に院の関係の歌が一首も入っていないというのはいかにも不自然である。『風雅集』には寂然自らが讃岐の院のもとに旅し詠まれた歌が二首残されているし、西行が院の死後に歌の衰退を嘆いて、讃岐から寂然とやりとりした歌も『山家集』一二二八・九番に残されている。

崇徳院のことを表立って歌ったものは家集に明記されていない。しかし院と寂然との関係を考えると「心なら

ずも」船出した人というのは院または院の関係者ではなかろうか。保元の乱で敗れて流謫の院であるが故に、その名を家集に明記することができなかったのであると解釈できまいか。一三六・七番歌は西海に旅して崇徳院に会った時の、旅の途中の歌であったのだろうか。[注15] そういう歌だとすれば、寂然にも院にも近かった西行に、寂然の歌にきわめて近い歌があるというものもわかりそうな気がする。

院をはさんで、寂然の歌と西行歌にもうひとつ興味深いものがあるのでついでに指摘しておく。

縁有りける人の、新院の勘当なりけるを、許し給ぶべき由、申し入れたりける御返事に

一一六三最上川なべて引くらんいな舟のしばしがほどはいかりおろさん

御返し奉りける

一一六四強く引く綱手と見せよ最上川そのいな舟のいかりをさめて

かく申したりければ、許し給びてけり　「山」

『古今集』の「最上川のぼればくだるいな舟のいなにはあらずこの月ばかり」を本歌として贈答のあった院と西行の歌、その「縁ありける人」は誰を意味するのであろうか。そしてやはり同じ最上川の「稲舟」を素材として

不自讃毀他

七もがみかは人をくたせばいなふねのかへりてしづむものとこそきけ　「書・唯」

という歌が寂然に残されているのは遇然の一致なのであろうか。

『山家集』の「縁ありける人」が実名を記されないのは、院の勅勘をこうむった人だからであろう。そして西行があえてとりなしたのであるから、その人は西行に親しい人であったにちがいない。一方寂然の歌は十重禁戒として題された十首の歌のうちのひとつであるから、この寂然の歌だけを見ればあくまでも一般的な罪を歌っているにすぎないのだ。しかし、西行と院との間でうたわれた「稲舟」とつき合わせてみると、単なる観念としての歌ではなく、現実に身辺に何かを見聞きしての諷喩の歌ととれてしまうのである。

それは例えば一説のように[注16]俊成であるとすれば、寂然が「不自讃毀他」の歌としてのこの歌を作ることが可能であろうか。寂然のこの歌は、結果として自讃し、毀他していることにならないか。あるいはもし寂然が身辺の他者に対してではなく、自分自身に課したる戒として自分に言い聞かせているとすれば、寂然自身が何かそういう事件で院の勅勘を蒙ることがあったのだろうか。しかし、そうだとすれば、院が讃岐に流された時、わざわざ会いに行ったりするものだろうか。

寂然の出家に際して

三ちりぬとてはなはにほはぬ春もあらじのきばのむめよわれをわするな　「高・唯」

と、太宰府に流された道真の「軒端の梅」になぞらえた歌を残したり、また近衛帝近侍の土佐内侍から「若菜の子」を文に包んで形見として贈られたという記事はあるが、出家の具体的な動機についても何も語られていない。ただ書陵部本『唯心房集』に以下の歌が残されている。

一七ひとり物おもふあきのよは　まんまんとしてぞあけがたき　またたくともし火しづ（のど）かにて　しづかにまどうつあめのこゑ

三三蘭省のはなのにほふとき　にしきの長をぞおもひやれ　香爐峯のよるのあめに　くさのいほりはしづかにて

七二よはひ顔駟にちかづきて　三代までこそしづみぬれ　仙鸞むかしの五噫のうた　われもうたひてさりぬべし

寂然の今様歌の多くは素材を『和漢朗詠集』や一般に歌われていた歌謡、『伊勢物語』などの古典からとっており、そういう意味では今ここにとり上げたものが『和漢朗詠集』を本歌にしていることについては例外ではない。しかし寂然の五十首前後残っている今様の素材や歌境ときわめて類似のものが、彼の短歌形式の歌の中に指摘できる。従って彼の今様歌を、遊戯性、虚構性に富んだ歌謡だと言い切ってしまうことは危険で、短歌の場合と同じく作歌当時の作者の心境が相応によみ込まれていると考えられる。そのように考えてみると、ここに引用した三首ははなやかな都での宮廷生活と、それに対置される恵まれない仕官生活を歌ったり、隠者の生活を歌ったり

しており、根底に寂然の出家前の生活に不満があったであろうことを予想させている。そして更に三番の、時平の謀略による冤罪で太宰府に流された道真の歌をつき合わせて考える時（寂然は壱岐守に任じられ、辞退している。彼には壱岐も太宰府も五十歩百歩の任地であったろう）何かが見えてこないか。

つまり、寂然は中央の官界で、崇徳院とかなり近い所での毀誉褒貶の事件にまき込まれ、そのことと彼の出家とが無関係でなかったろうと思われるのである。しかし、これはあくまで数少ない資料をつなぎ合わせた上での、何十分の一、何百分の一の可能性を睨んでの考察であることを記し添えておく。

（五）

最後に寂然の歌の出家生活の孤独をうたったもので、西行歌と素材や技法の上で近似の方法のとられているものを指摘しておく。

六一にはのはなわけばみだれてちりぬべみ秋はうしろにかよひぢもがな　「高・唯」

雪朝待人

五三二わが宿に庭よりほかの道もがな訪ひこん人の跡つけで見ん　「山」

寂然の歌は庭の花を惜しむが故に家の裏に道がほしいといい、西行歌は冬の朝の雪の庭の風情を惜しんで、自分の庵に訪ねて来る人のためにそれ以外の道がほしいといっている。

発想の類似である。

九七月を見てあはれしるらんやどごとに身を分けてこそとはまほしけれ　「高・唯」

題しらず　西行法師

一六四二誰すみてあはれしるらむ山ざとに雨ふりすさむ夕暮の空　『新古今集』

寂然の歌は月は見て「あはれしるらんやど」を訪問してみたいといい、西行歌は雨の降る夕暮れの「山里」に誰が住んで「あはれ」な情感にひたっているのであろうかというのである。いずれも山里の「あはれ」を誰かと共有したいといっているのである。

一一五たれかまたまきのいたやにねざめしてしぐれのおとにそでぬらすらん　「高・唯」

四九六時雨かと寝覚の床に聞ゆるは嵐に絶えぬ木の葉なりけり　「山」

寂然の歌の「まきのいたや」は高野を想像させる。まきの板屋で同じように眠りから覚めて、わびしい住まいに時雨が降り注ぐその音に耳を傾け、涙していることであろうかというのである。西行歌は、時雨の降ってくるような音に眼を覚ましたら、谷を渡っていく風に木の葉の散らされる音だったというのである。両者の歌をつなぐものとして、俊成の

四〇四まばらなるまきのいたやにおとはしてもらぬ時雨やこのはなるらん　『千載集』

の歌を間に置いてみるとわかり易い。

六〇露ふかきよもぎがもとをかきわけて月は見るやとふ人もなし　「高・唯」

一二七しもさゆるあしのしのやにねざめしてひまやしらむとまたぬよぞなき　「高・唯」

五二一霜さゆる庭の木の葉を踏みわけて月は見るやと訪ふ人もがな　「山」

寂然の六〇番と一二七番歌とを合成して作ったのが西行の五二一番歌だとでもいいたくなる位、みごとな対照である。三首とも草庵で友を待つ歌である。一二七・五二一番歌は「霜さゆる」を初句に置き、「……して」友の訪問を待っているという歌の構成である。

五一なにごとをさしておもふとなけれどもたもとつゆけき秋のゆふぐれ　「高・唯」

二九一なにごとをいかにおもふとなけれども袂かわかぬ秋の夕暮　「山」

まるで同一人の作と言ってよい程の類似である。あるいはこれらの歌が母胎となって、三夕の歌のひとつの西行の「鴫立つ沢」が生み出されていったものであろうか。

一四九見し人はかくれのみゆくあだぐもにいつたぐふべ

き月日なるらん　　「高・唯」

寂然大原にてしたしき物におくれてなげき侍りけるに、つかはしける

四三二露ふかき野辺になり行く故郷はおもひやるだに袖しをれけり　　「西」

ともに寂然の身辺の人の死を契機に、いつの間にか月日が過ぎていくこの世の無常を嘆いたものである。一四九番歌が四三二番歌の返歌だというつもりはない。

四一かねてよりこころはすみぬあきの夜のつきまつみねのこがらしの風　　「高・唯」

四五六かねてより心ぞいとどすみのぼる月まつ峰のさをしかの声　　【新拾遺集】

素材と歌の構成の類似に注意したい。

以上、これらの対にして提示した歌は、どういう情況で歌われたものであるかはわからない。寂然の歌と西行歌は、限りなく近付き、また無限に遠ざかるのである。

（注）

1　引用に際し、高松宮蔵本『唯心房集』は「高・唯」、書陵部本『唯心房集』は「書・唯」、書陵部本『寂然法師集』は「書・寂」、『山家集』は「山」、『西行法師家集』は「西」、『聞書集』は「聞」、『残集（西行）』は「残」と略記する。

2　新潮日本古典集成本、頭注による。詳細な検討は別の機会に譲りたい。

3　『山家集』では「寂然人道、大原に住みけるに遣はしける」、『新勅撰集』四一五番では「高野に侍りける時、寂然法師大原に住み侍りけるに遣はしける」、『西行法師家集』七二四番では、第四句目は「雪の戸ぼそ」になっている。

4　『山家集』八〇五～八〇八番歌。

5　いさぎよくいけのこころやすみぬらんにごりにしまぬはなさきにけり

6　事実、西行の歌の中には月輪観を詠みこんだものをいくつか指摘できる。山田昭全著『西行の和歌と仏教』（明治書院）二六～二七、四二、六二、八二～八三、二一四頁など、参照。

7　この小野は、京都市左京区八瀬、大原一帯の古名で

ある。小野朝臣当岑が居住し、惟喬親王が閉居した所である。

8　『山家集』一〇四七番歌の詞書では、「大原に良暹が住みける所に、人々まかりて、述懐歌詠みて、妻戸に書き付けける」とある。

9　おほはらやまだすみがまもならはねば我がやどのみぞけぶりたえたる　良暹

10　高松宮蔵本『唯心房集』一三三番歌、書陵部本『唯心房集』四八番歌、『山家集』五六六番歌など。

11　『山家集』七三四・五番歌。

12　書陵部本『唯心房集』六二「三けうしみのむしろには　五さうありとてきらはれし　女人へだてぬみのりこそ　我らがためにはうれしけれ」

13　一一〇番歌は「昔、都にいた頃ながめた月は、今旅先でもその月だけはあなたを離れることなく、依然として空にかかっていることであろうよ」の意。「月のみや」は、月宮・月宮殿・月の異称であるが、雲井の縁語として「月のみや」「月のみやこ」が連想される。四七二番歌も「月だけが」と「月の宮」とが同様に掛詞になっているのは、小学館『日本国語大辞典』の「月の宮」で、この歌を引用していることでも知られる。

14　『群書解題』の「法門百首」解説による。

15　書陵部本『唯心房集』五二番「おもはぬたびのそらにいでて　みやこはくもゐになりにけり　きみとながめしよはのつき」の歌も、寂然が四国に旅した時の歌と想像しうる。流謫の身とはいえ院のことを「君となながめし夜半の月」とくだけた調子で歌えるのは、今様という遊戯性に富んだ文学形式であることと、実名を明かしえない立場の人を歌っているせいであろうか。

16　伊藤嘉夫著、朝日古典全書本『山家集』（昭22刊）、一二五一番頭注に「御不興の御咎を蒙ってゐたのは俊成であらうか。還昇仰せ下されぬを「雲居より馴れし山路を今更に霞隔てて嘆く春かな」の歌が長秋詠草に見える」と指摘している。

（原稿受付・平成元年三月三十一日）

*長岡技術科学大学計画・経営系